

埼玉県川越市街における景観変化と観光化

山下 琢巳・高橋珠州彦・田嶋 豊穂
・小口 千明・古川 克

目 次

- I はじめに
 - (1) 問題の所在と本稿の目的
 - (2) 観光化が顕著となる以前における川越へのまなざし
- II 川越における商業地の変遷と観光化
 - (1) 鉄道建設と近代川越の都市軸
 - 1) 鉄道都心直結競争と川越鉄道
 - 2) 3つの「中心駅」と商業地の変化
 - (2) 特徴的な商業地の形成と観光化
 - 1) 菓子屋横丁の盛衰と観光化
 - 2) 蓮馨寺門前と遊興空間
 - (3) 丸広百貨店の出店と商店街のモール化
 - 1) 丸広百貨店の出店行動と都市軸の移動
 - 2) ショッピングモール化する商店街
 - 3) 旧鏡山酒造跡地の活用と商店街
- III 川越と小江戸
 - (1) 小江戸と小京都
 - (2) 城下町川越の空間構造
 - (3) 江戸時代に由来する川越の構成要素と「小江戸」
 - 1) 川越城とその遺構
 - 2) 宗教施設の意味と江戸
 - 3) 町人地と河岸
- IV 観光化の進展における新たな観光資源点描
 - (1) 観光資源化する商店街
 - 1) 蔵造り景観「一番街」の観光資源化
 - a. 川越城下町における商業地の形成
 - b. 川越大火と「蔵造り」
 - c. 商業機能の衰退と景観の再評価
 - 2) 大正浪漫夢通りの観光資源化
 - (2) 旧川越織物市場と旧栄養食配給所
 - (3) 旧川越電気鉄道「川越久保町駅」跡
- V おわりに

I はじめに

(1) 問題の所在と本稿の目的

今日の川越市街は、「蔵造り」の街並みを核として形成された観光地ということができよう。川越市街のうち、蔵造りの建物が連続する一番街やそのすぐ西側に位置する通称「菓子屋横丁」を休日の日中に歩くと、行き交う観光客どうしが接してしまうほど混み合う盛況ぶりである。川越への探訪を誘う観光パンフレット類は多種多数が作成され、沿線の鉄道駅や旅行代理店などに置かれている。このように、現代の川越市街を観光地とみなすことはほぼ異論がないと思われる。

しかし、この川越市街が多くの人々から「観光地」と認識されるようになるのはさほど古いことではない。城下町として江戸時代からにぎわい、大正期には埼玉県下で最初に市制を施行した川越であるが、第2次大戦後の一時期には中心商店街衰退の危機に直面した。その苦境を経たのち、昭和後期から平成期にかけて観光地化が進展したものである。本稿では川越市街の観光化に焦点を当て、川越市街が観光地として認識されるにいたる経緯を跡づけるとともに、観光地としての川越市街がもつ特質を検討する。そのため、実際の景観のいかなる点に着目すれば川越市街観光化の特質が把握できるかについて、人文地理学・歴史地理学の観点から明らかにすることが本稿の目的である。

川越市街の形成や商業活動について、地理学では三友国五郎⁽¹⁾、立正大学人文地理研究グループ⁽²⁾、川越市総務部市史編纂室⁽³⁾、杉村暢二⁽⁴⁾による成果がある。これらの研究は、川越の商業や商店街に関して詳細な論述があるなど参考になる。ただし、川越市街の観光化に関してはほとんど扱われていない。観光化が進む川越に関して、地理学からは溝尾良隆・菅原由美子⁽⁵⁾、溝尾良隆⁽⁶⁾、寺阪昭信・内藤ふみ⁽⁷⁾、犬井 正⁽⁸⁾、永野征男⁽⁹⁾の成果がある。これらの研究により川越観光化の実態はかなり明らかになったといえるが、実際の景観のいかなる点に着目すれば川越観光化の特質が把握できるかについては論じられていない。また、その点を検討するうえで重要な鍵になると思われる、通称としての「小江戸」の問題について十分に検討されているとはいえない。観光地川越に対する通称としての「小江戸」については民俗学から松崎憲三⁽¹⁰⁾の検討があるので、本稿ではそれらを踏まえて総合的に考察を行う。「小江戸」という通称についてはのちに詳しく検討するが、「当該地域らしさとは何か」⁽¹¹⁾という問題や「景観復原における真正性とは何か」^{(12), (13)}という問題に深く関わる重要な概念ということが出来る。

なお、川越地域を対象とした異色の学術文献として島津 弘⁽¹⁴⁾がある。この論考は自然環境——とりわけ地形という視点から旧川越城とその城下町を捉え、巡検等で川越を実地見学するうえでの着眼点を解説した内容になっている。筆者らはこの論考に触発され、川越市街の景観を

歴史地理学の視点から捉えるうえで鍵となる着眼点を示すことを試みた次第である。

(2) 観光化が顕著となる以前における川越へのまなざし

川越における観光化が顕著になる以前において、旅行や観光の手引きとなる書物の中で川越は
いかに紹介されていたのであろうか。ここでは、かつて広く利用された旅行の手引き書を参照し
て、旅行先というコンテキストからみて川越がいかに描かれていたかを通時的にみていく。

まず、鉄道省が昭和初期に編纂した『日本案内記 関東編』⁽¹⁵⁾を検討する。『日本案内記』は
全7冊からなる日本全国を対象とした旅行案内で、主要鉄道路線の沿線はかなり網羅的に紹介す
る内容になっている。川越は「上野軽井沢間」の鉄道沿線に位置づけられ、その中の「大宮駅」
関連の説明項目として登場する。すなわち、昭和初期の川越にはすでに東武鉄道・西武鉄道の便
はあったものの、当時の幹線鉄道である国鉄から遠く離れており、国鉄を中心とする旅行案内に
おいて不利な立場にあった。

「川越」において取り上げられている項目は「喜多院」「東照宮」および「養寿院銅鐘」である。
喜多院と東照宮は現代においても訪れる人々が多い。養寿院は川越市内の元町に位置する寺院で、
同寺院の銅鐘が文化財保護法制定以前の旧制度⁽¹⁶⁾による国宝であったことが注目された。この
銅鐘は貴重な文化財であり「歴史資源」といえるが、現代において必ずしも多くの人々から「観
光資源」として認識されているとはいえない。また、今日において観光の中心となる蔵造りの商
家についてまったく言及がない点が注目される。本書が刊行された昭和戦前期において、もとよ
り蔵造りの町並みは存在していたわけである。さらに、「小江戸」の呼称についてまったく言及
がない点も興味深い。この『日本案内記 関東編』には主要産業に関する地理情報が記載されて
おり、川越では米穀に加えて甘藷、製茶、繭、生糸、織物の集散地であることが紹介されてい
るが、甘藷を加工した芋菓子への言及はない。

つぎに、第二次大戦後の1958（昭和33）年に刊行された案内書『日本観光大鑑』⁽¹⁷⁾を検討す
る。本書は日本全国を対象とし、主要宿泊施設や「観光スポーツ施設」情報等と多数の写真を掲
載した大部の旅行手引書である。川越に関しては「喜多院」「仙波東照宮」「川越城跡」「三芳野
神社」「氷川神社」「日枝神社」が取り上げられており、「米、さつまいも、生糸の生産が盛ん」
とある。さらに、旅館として「佐久間」と「松村屋」が掲載されている。これらの記載から、川
越の見どころとして城跡や神社仏閣が想定されており、蔵造りの商家による町並みは、なおまだ
観光資源として認識されていなかったことがわかる。「小江戸」との呼称への言及はなく、さつ
まいもの加工品に関する記載も見られない。

さらに、同書の8年後に改訂刊行された日本交通公社による『旅程と費用』⁽¹⁸⁾を検討する。本
書は大手旅行代理店JTBの前身である日本交通公社が編集した旅行に関する実務書で、大部な

ものである。川越の項においては「喜多院」「東照宮」「日枝神社」「時の鐘」「川越城跡」「霞ヶ関カンツリー倶楽部」が取り上げられている。現代において蔵造りの町並みと深く関わる「時の鐘」が登場したことが特筆される。ただし、蔵造りの町並みについての言及はなく、「小江戸」との呼称についても紹介はない。本書では「名産」として「いも菓子・箆笥・入間ごぼう・にんじん」が挙げられるとともに、「俗に駄菓子横丁と呼ばれる小さな通りには、駄菓子屋が軒を並べている」との記述があり、今日「菓子屋横丁」と呼ばれ、重要な観光資源となっている小路の紹介が登場する。

以上通覧したように、「観光地」としての川越では昭和初期以来長らく「喜多院」と「東照宮」がもっとも定評のある観光資源であり、今日きわめて注目を浴びている蔵造りの町並みは古くから存在するにもかかわらずほとんど注目されてこなかったことが判明する。後述するように、川越における蔵造りの町並みには後に電柱の埋設化など若干の修景事業も行われるが、基本となる蔵造りの商家群は不変であり、川越における蔵造りの町並みという観光資源は景観変化によって出現したものではなく、それを見る人間の側の「価値観」が変化したと理解することができる。

II 川越における商業地の変遷と観光化

鉄道開通以前の川越中心商店街は、近世城下町の町割によって成立した十カ町四門前町を受け継いだものである⁽¹⁹⁾。IIでは、近世に形成された商業地が鉄道開通の影響を受け、今日のように南北に拡大する過程とそれに伴う商業地の変容に着目する。

(1) 鉄道建設と近代川越の都市軸

川越の市街地は近代以降、南北方向の都市軸が形成され、徐々に南へと拡大していった。そして今日川越観光の中心地として多くの人々が訪れる「一番街」から「菓子屋横丁」付近を最北に、仲町交差点から大正浪漫夢通り、本川越駅周辺から川越駅東口まで続く埼玉県下最大の賑わいを誇るクリアモール商店街へと、南北方向の都市軸が川越観光の主要な動線として機能している。近代川越における都市軸の形成と南下は、鉄道の建設と大きく関わっている。

1) 鉄道都心直結競争と川越鉄道

現在の西武新宿線の前身、川越鉄道が川越で最初の鉄道として甲武鉄道接続駅の国分寺・川越（現、本川越駅）間で開通したのは1895（明治28）年のことである。川越鉄道は埼玉県比企・入間・秩父・高麗の各郡や神奈川県西多摩郡（当時）の物資を東京市街へ輸送する目的で計画され、高麗郡や所沢町の人々らが設立発起人として名を連ねていた⁽²⁰⁾。舟運によって物資を東京市街

に輸送していた川越の舟運業者らは、川越鉄道の開通によって経営の打撃を受けた。このことがきっかけとなり、仙波河岸の船問屋丸川水運回漕店を経営していた綾部利右衛門を出願人総代として、大宮駅で日本鉄道（現、JR 高崎線）に接続する馬車鉄道が計画され1902（明治35）年に開業した⁽²¹⁾。この馬車鉄道は、後に綾部らが設立した川越電灯と合併し、1906（明治39）年に川越久保町・大宮間を結ぶ川越電気鉄道となった⁽²²⁾。大宮駅で日本鉄道に接続し新たな都心方面のルートが確保されると、川越から都心方面への乗客は大宮経由に流れるようになった。この二つの鉄道開通以降、川越と都心とを直結して結ぼうと様々な路線が計画され、都心直結競争の様相を呈することになる。まず川越の商人や新河岸川福岡河岸（現、埼玉県ふじみ野市）の回漕店、白子村（現、埼玉県志木市）の商人などが発起人となって池袋と川越を結ぶ京越鉄道の設立計画が出された⁽²³⁾。京越鉄道計画は仮免許の取得にとどまり実現には至らなかったが、1914（大正3）年に池袋・田面沢⁽²⁴⁾間で開通した東上鉄道の計画に発展していく。この東上鉄道が川越と東京市街を直接つなぐ最初の鉄道路線となった。一方で1915（大正4）年に川越鉄道の所沢駅で交差し、池袋・飯能間を結んだ武蔵野鉄道も川越鉄道を脅かす都心直結鉄道となった。そこで川越鉄道は、東村山から中野駅で甲武鉄道に接続する路線や、箱根ヶ崎から東村山経由で吉祥寺駅を結ぶ計画をもくろんだが、いずれも武蔵野鉄道や甲武鉄道と近いこと、建設経費の割に国分寺駅経由との大差がないことなどから実現には至らなかった。この頃川越電気鉄道を経営していた武蔵水電から電力供給を受けて電化した川越鉄道は1920（大正9）年に武蔵水電と合併し、後に西武鉄道と改称した。西武鉄道はこれまでに取得していた鉄道新設の免許に加えて新たに高田馬場駅までの免許を取得し、1927（昭和2）年に東村山・高田馬場間を結ぶ路線を開通させ、川越から東京市街への直結を実現させた。

2) 3つの「中心駅」と商業地の変化

今日、「川越」と名の付く鉄道駅は川越市内に4駅ある。そのうち西武新宿線の本川越駅、東武東上線の川越市駅、東武とJRの川越駅が市街地の中心部に位置する。市街地の中心部に3つの「中心駅」が存在することは、そのまま川越における鉄道建設の事情を物語るものである。一方、商業地との関係で鉄道駅の位置を考えると、近世の川越城下町からはるか南にこの3駅が立地したことは、川越の中心市街地を徐々に南に拡大させた要因そのものであったといえる。

3駅のうち、最初に開設されたのが1895（明治28）年に川越鉄道の終点として開業した「川越駅」（現、西武鉄道本川越駅）であり、次に開設されたのが、1914（大正3）年に開通した東上鉄道の川越町駅（現、東武鉄道川越市駅）である。現在東武とJRが接続している川越駅は、東上鉄道開通の翌1915（大正4）年に川越西町駅として開設されたものである。ところで、今日の川越を代表する商店街クレアモールは川越駅東口を端点として本川越駅方向へ続く商店街であ

るが、この道路は川越と江戸を結ぶ「川越街道」の西側に並行し、所沢方面に通じる「所沢街道」の一部であった。東上鉄道の開業によって分断されるまでこの道は、通称「西町通り」とよばれ、周囲が閑散としていたところに川越西町駅が開設された。1940（昭和15）年に大宮・高麗川間を結ぶ国鉄川越線が開通し川越西町駅で両線が接続することになり、同駅は川越駅と改称、西武鉄道の川越駅は本川越駅へと改称した。川越鉄道と東上鉄道は都心直結競争を繰り広げる競合関係であったため、両鉄道が接続することはなかった。しかしながら、3駅が市街地の南方に集中し、接続しないまま存在し続けたことにより、鉄道の乗り換え利用者が本川越駅と川越駅間を徒歩移動する必要から人通りの多い商店街へと発展し、川越の都市軸を徐々に南方へ拡大させる要因となった⁽²⁵⁾。

(2) 特徴的な商業地の形成と観光化

川越城下町を代表する中心商業地は蔵造りの町並みが残る「一番街」であるが、城下町の外縁部にも特徴的な商業が形成された。すなわち、一つは川越城下町の西端に位置する通称「菓子屋横丁」、もう一つは城下町の南に位置する蓮馨寺境内から東の門前に続く遊興空間である。

1) 菓子屋横丁の盛衰と観光化

今日の川越観光の主要な目的地にもなっている菓子屋横丁とは、川越菓子屋横丁会に加盟する21軒の菓子屋が集中する一角のことである（図1）。川越市役所や札の辻交差点から西に向かう通称「高澤通り」と一番街商店街の西側に並行する通称「寺町通り」が交差する丁字路の80mほど南側から西に折れ、途中で北進して高澤通りに抜ける100mあまりのL字型をした路地がその中心である。菓子屋横丁に集まる菓子職人が製造する菓子は「駄菓子」といわれるが、高級菓子との明確な区分はなく、かつて周辺地域の農家向けの飴やお茶菓子を製造販売していたことから駄菓子と称している。

菓子屋横丁が形成された起源は、明治の中頃、旧高沢町で菓子製造を行っていた鈴木藤左衛門の弟子や分家、上州出身の菓子職人らがこの付近に集住するようになったことがその端緒といわれている。現在では観光客向けの「駄菓子」を扱う小売店が目立つが、当初はそれぞれに異なる菓子の製造・卸を行う菓子職人が集住しており、仲買人がこの横丁でそれぞれに専門化した菓子屋をまわり買い付けを行っていた⁽²⁶⁾。この路地は、かつて養寿院の裏門に通じ、墓参のために養寿院を訪れる人々の近道とされる以外に人通りも少なく、付近には高澤通りや大連寺前の横丁に有平糖や金花糖、生菓子、パンなどを製造する数軒の家があるのみであった⁽²⁷⁾。この路地に高澤通り周辺や大連寺門前、石原町⁽²⁸⁾の菓子職人らが徐々に移り住み、昭和初期には50~60軒の店が軒を連ねた。関東大震災で東京の菓子製造が打撃を受け、埼玉県下でも浦和や草加など東

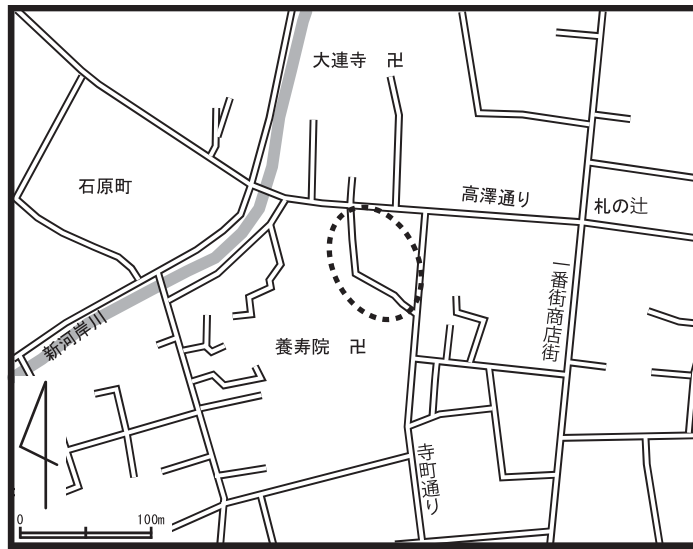


図1 菓子屋横丁周辺の概況

国土地理院電子国土 Web「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/#18/35.924449/139.481633/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j010u0f0>)を基に作成
注：破線で囲まれた付近が「菓子屋横丁」

京寄りの菓子屋も菓子を出荷できなくなったため、菓子屋横丁の菓子屋は東京向けの製造で活況を呈した。

ところが、戦時期における砂糖の配給統制により、菓子屋は4軒にまで減少した。第2次大戦後しばらくは衰退した時期が続いていた菓子屋横丁であったが、1980年代から進んだ市街地の整備事業は菓子屋横丁の路地にも変化をもたらした。川越市は、1989（平成元）年の建設省による歴史的地区環境整備街路事業によって菓子屋横丁を一番街と合わせた石畳舗装の路面にし、川越における観光の拠点としての情報発信に努めた。こうした行政による街路整備と川越を訪れる観光客の増加が相まって次第に新たな菓子屋の進出が目立つようになり、菓子屋横丁は現在のよ様な賑わいを取り戻している。こうして川越における観光の重要な拠点となった菓子屋横丁であるが、2015（平成27）年6月には6棟を焼失する火災に見舞われた。焼失した菓子店の跡地を中心に、将来に向けて防火対策を施しつつ菓子屋横丁の再建が進められている。

2) 蓮馨寺門前と遊興空間

川越城下町を構成する十カ町四門前の一つで城下町の南端に位置する蓮馨寺門前は、川越の市街地が南へ拡大する近代において、遊興空間としての性格をもち高度経済成長期に至るまで賑わいを保っていた。

蓮馨寺は1549（天文18）年に感誉上人存貞大和尚によって開山した浄土宗の寺院である。感

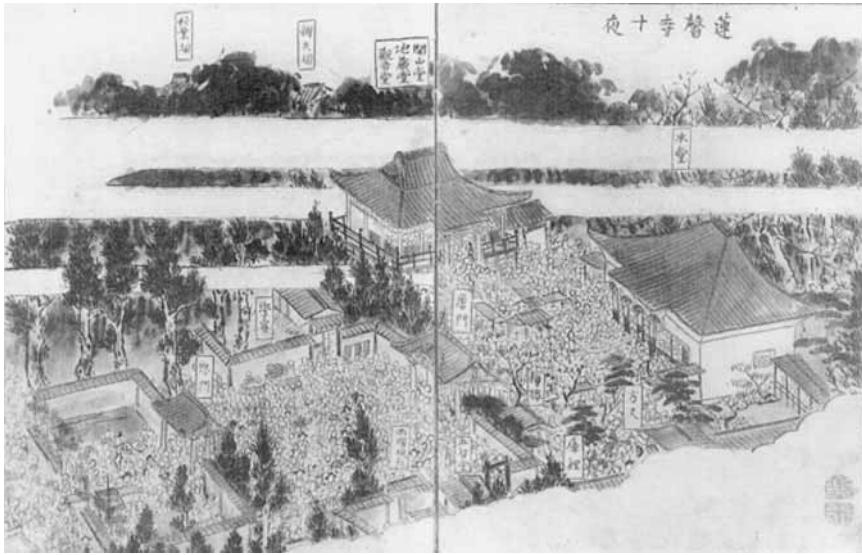


図2 武蔵三芳野名勝図会に描かれた蓮馨寺の十夜行事の賑わい
(山野清二郎校注・川越市立図書館編『校注武蔵三芳野名勝図絵』より)

誉上人は北条氏康の甥にあたる。1546（天文15）年の「河越夜戦」で北条氏康が上杉・足利の両軍に対し勝利した後、家臣で河越城主の大道寺駿河守政繁の母蓮馨大姉による請願にて開基した。感誉上人は後に浄土宗大本山増上寺の法主となる人物である。感誉上人の孫弟子で現在の群馬県太田市にある大光院の開山呑龍上人（通称「子育て呑龍」）が貧困や早魃に悩む人々の子供を育てたことに因み、毎月8日に境内と門前の立門前通りに連雀商人が集まり「呑龍さんの縁日」として賑わった（図2）。蓮馨寺前を南北に蔵造りの町並みと本川越駅をつなぐ道路が開通する1933（昭和8）年まで、大正浪漫夢通りまでの範囲が蓮馨寺の境内であった。南北の道路によって分断される以前は境内の参道であった現在の立門前通りは、沿道に呑龍さんの縁日の際に多くの出店や芝居小屋などが立ち並んだ。昭和30～40年代には商店街のサービスとして境内にミニ遊園地「ドリームランド」やローラースケート場などが設置されたほか、10月に行われる川越祭りの際には見世物小屋やお化け屋敷が出現し、大いに賑わった。立門前通りに今も残る「鶴川座」は1898（明治31）年に蓮馨寺境内に設置された芝居小屋が起源である。現在の鶴川座の建物は、後に映画館や商店などに改装されながらも、内部には回り舞台装置を残す建物として現存しており、蓮馨寺門前が遊興空間としての賑わっていた様子を今日に伝える貴重な建物である。

(3) 丸広百貨店の出店と商店街のモール化

1) 丸広百貨店の出店行動と都市軸の移動

川越において「一番街商店街」からクレアモールまで南北方向に商店街が連なる中心市街地が

形成されたのは、先述の通り、鉄道駅が市街地の南方に立地したことと大きな関係がある。それに加えて近代川越の商業地形成に大きな影響を与えたのが、今日も新富町に立地する丸広百貨店の出店行動である。

現在埼玉県下最大の商店街となっているクリアモールの中でも中心的な存在である丸広百貨店は、1939（昭和14）年に埼玉県飯能町にて丸木商店として創業した。創業者は飯能の製茶農家出身の大久保竹治で、八王子の総合衣料卸問屋丸木で奉公した経験を持つ。大久保は飯能に帰郷した後、衣料品を小売する個人商店を開業した。その後、1949（昭和24）年に株式会社丸木として会社組織化を果たし、多店舗経営を目指して新たな進出先を模索していた。創業地飯能から丸木が川越に最初に進出したのは1951（昭和26）年のことで、当初は一番街南端の仲町に店舗を構えた（図3）。仲町の店舗は川越の老舗呉服商渡辺吉右衛門が経営する山吉の洋風建築を譲



図3 主要な商店街の位置と丸広百貨店

国土地理院電子国土 Web「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/#16/35.913844/139.483602/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1j010u0f0>) を基に作成

り受けたものであった。この川越進出を機に、丸木は、大宮店、東松山店と順次開業し4店舗体制となった。そして4店舗での経営を達成した1956（昭和31）年に社名を丸木から丸広百貨店へと変更した。このころから土地に限りがある仲町の店舗（図4）では、その後急増が見込まれる自動車利用者の来店に対応できないと判断した大久保は、店舗を新たな場所に移転し大型百貨店化する計画に着手した。この時に新たな立地場所としたのが、現在の新富町の店舗が位置する場所である。この付近は所沢方面に向かう通称「西町通り」が南方に開設された川越駅に直結していること、駅周辺には商業施設が少なく空地が広がっており駐車場を含めた広大な敷地の確保が可能であることの二つの条件から新たな移転先として選定した。当時閑散としていた西町通り沿いでも広大な建設予定地にはいくつかの民家があり、新店舗を建設する際は住民の移転が必要であったため、現地より南東方向の川越街道沿いに移転住民137軒分の土地と家屋を用意し無償で住民を移転させたという⁽²⁹⁾。こうして丸広百貨店川越店は1964（昭和39）年、現在地に移転開業した。この移転に合わせ、丸広百貨店は本社機能を飯能から川越に移した。この後も丸広百貨店は、川越駅東口周辺の再開発事業によって1990（平成2）年に完成した駅前の商業施設においてもメインテナント「アトレマルヒロ」として出店している。こうした丸広百貨店の出店



図4 旧山吉の建物を利用していた頃の丸広
（大久保竹治『商い街道まっしぐら』丸広百貨店、
1998、85頁より）

行動は、まさに川越の商業地が南へと拡大し都市軸が移動していった動きを象徴するものである。

2) ショッピングモール化する商店街

鉄道駅の開設以降、南へと商業機能の重心を移してきた川越のなかでも、最も南に位置する商店街は今日のクレアモールである。クレアモールとは、川越新富町商店街振興組合と川越サンロード商店街振興組合の二つの商店街の統一名称である。西武鉄道の本川越駅と、東武鉄道・JRが乗り入れる川越駅との間を結ぶクレアモールは、鉄道の乗り換え利用者と買い物客で大いに賑わう商店街となっている。2009（平成21）年に埼玉県が実施した県下91商店街の通行量調査では、平日の平均歩行者通行量第1位が川越サンロード商店街（調査地点：クレアパーク前）、第2位が川越新富町商店街（調査地点：丸広百貨店前）、休日の第1位が川越新富町商店街、第2位が川越サンロード商店街であった⁽³⁰⁾。すなわち、第1位、第2位ともにクレアモールということになる。

二つの商店街は川越駅から北へ約1km続く直線道路を共有しており、南側入り口から約200m付近のクレアパークまでが川越サンロード商店街、クレアパークから新富町一丁目と連雀町との境界までが川越新富町商店街となっている。クレアモールという統一名称は、この道路（市道1342号線）の電線地中化工事を機に1997（平成9）年から使用されているが、それ以前は二つが別々の商店街として活動しており、街灯などの装飾も異なっていた。しかしながら電線地中化工事を契機として、クレアモールという名称の使用や共通ロゴマークを導入し、商店街組織が二つに分かれていながら、それぞれが異なる方向性を主張するのではなく、一本の直線道路が貫く統一感のあるショッピングモールとしてアピールしている。

クレアモールに丸広百貨店が移転する以前の「西町通り」と称していた時代には、商店はまばらで所々に畑が広がっており、川越の有力な商店街は依然として「一番街」から「銀座通り」（現在の大正浪漫夢通り商店街）辺りとなっていた⁽³¹⁾。このように丸広百貨店は、当時川越の商店街としては「三等地」であったこの付近における商店街形成の火付け役として、川越市商業の新たな中心になることを目指して移転開業したのである⁽³²⁾。こうして丸広百貨店を中心に形成された商店街では、丸広百貨店の定休日と休日を一致させる商店も多く、長らく丸広百貨店との共存を図ってきた。クレアモールの沿道には丸広百貨店の他、本川越駅前に立地するイトーヨーカドーやニチイ、西友、長崎屋、丸井などの大型店が立地していたが、丸広百貨店を除き、大型店は軒並み撤退しパチンコ店や専門店ビルなどとして姿を変えた。近年では個人商店や専門店の廃業や撤退が相次ぎ、代わって各地でチェーン展開する店舗の出店が増えたことで、商店街の没個性化が進行した。「クレアモール」としての再出発は、モール化することによって商店街の個性を打ち出そうとする新たな商店街の戦略ともいえる。

3) 旧鏡山酒造跡地の活用と商店街

川越駅から人通りの多いクレアモールを北上すると、本川越駅付近から北側で人通りが減少する。クレアモールの本川越駅以北の位置に新たな施設として立地したのが、旧鏡山酒造の酒蔵跡を利用した川越市産業観光館「小江戸蔵里」である。

旧鏡山酒造は、現在の新潟県上越地方出身の竹内栄吉が1843（天保14）年頃に現在の埼玉県入間市にて「久屋」の屋号で酒造業を創業したことに起源をもつ。共同経営であった「久屋」から独立した竹内は、その後1875（明治8）年に川越の地に酒蔵をたて、それは2000（平成12）まで「鏡山酒造」として存続した（図5）⁽³³⁾。鏡山酒造の廃業後、川越市は歴史的資産を活用したまちづくりのため酒蔵3棟を含む敷地全体を取得し、2010（平成22）年に「小江戸蔵里」を開館した。現在、敷地内では「明治蔵」（おみやげ等物販）、「大正蔵」（レストラン）、「昭和蔵」（農産物等物販）、「瓶詰作業所」（管理棟・ギャラリー）が保存活用されている。なお、店内で販売されている「鏡山」ブランドの酒は、地元有志が2007（平成19）年に設立した小江戸鏡山酒造によって復活したものである。小江戸鏡山酒造は、川越市中町の松本醤油店の敷地提供を受け、同敷地内で製造を行っている。

この「小江戸蔵里」は「鏡山」ブランドの酒の他、様々な川越の産物を販売しており、川越観光に訪れた観光客が帰途につく前に立ち寄り土産物を購入する新たな定番スポットとなっている。繁華な商店街と観光の目的地との間に旧酒蔵の跡地をそのまま活用して、新たな観光施設が開業

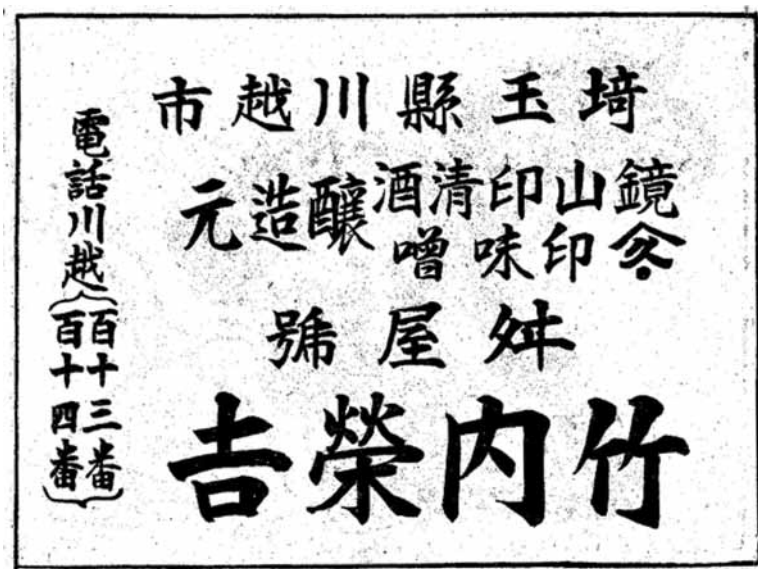


図5 竹内栄吉による広告（大正期）

（井上勘兵衛『川越郷土能獅子舞由来記附川越案内』川越郷土能獅子舞後援会，1925，34頁より）

したことも、川越の南北方向の都市軸が顕著に影響したことの表れであるといえる。さらに、モール化する商店街の中に歴史的建造物のストックを活かして新たな観光施設が立地したことは、今後の商店街の在り方を示唆するものとして注目したい。

Ⅲ 川越と小江戸

(1) 小江戸と小京都

関東地方を中心として、歴史的に江戸と地域間関係を有し、伝統的な町並みや風情をかつての中心商業地の一角に残している都市を「小江戸」と称することがある。そして今日ではその名称が観光客の誘致と密接にかかわり、住人の地域アイデンティティを育む源ともなっている。この「小江戸」名称が定着した代表的な都市として、埼玉県川越市、千葉県香取市（旧佐原市）、栃木県栃木市の3つが挙げられる⁽³⁴⁾。また、これら3都市には、祭礼時に江戸を発祥とするか、もしくは由緒の深い山車が伝わっており、現在でも付祭りの行事に曳き回されること、そしてその際には同じく江戸を発祥とする祭囃子が演奏され、町中において絢爛豪華な時代絵巻を再現することも、「小江戸」たらしめる重要な要素となっている。

このように、今日の「小江戸」という概念には、江戸・東京と経済的に強いつながりを持ち、ヒト・モノが集散することで創出される賑わいが江戸に匹敵するという意味合いと、江戸時代的な景観や行事を随所に残しているという、異なる2つの意味合いが混在して使用されていることが知れよう。このうち、特に町が有した経済活動の度合いは、例えば江戸と直接的な地域間関係をほとんど有していない北海道南部の江差（現、檜山郡江差町）に、「江差の五月は江戸にもない」⁽³⁵⁾という謳い文句が伝わっていることも興味深い。すなわち「江戸」という言葉には、常にヒト・モノ・カネの集まる巨大な中心都市という意味合いがあり、それが各地で共有されているため、特定の地域を江戸に「見立てる」ことが比較的受け入れやすいものであったことが推察される。

他方で、「小江戸」に類似して流布する言葉として「小京都」というものが挙げられる。この「小京都」と称する地方都市は西日本と東北に多く⁽³⁶⁾、小江戸と同様に「見立て」の一つとして使われてきた名称である。一方で、本来西日本の経済活動の中心地を考慮した際には、第一の都市「大坂」を意図した名称が想起されるのであるが、それをを用いずに「京都」と呼称することもまた、西日本独特の「見立て」に対するイメージが存在しているものと思われる。

ところで、東日本で一般的な「小江戸」を用いる場合、「小京都」と異なる大きな特徴として、先述のとおり「江戸時代」という時代区分まで「見立て」の意図に含んでいることが挙げられる。この「江戸時代以来の景観」あるいは「江戸時代らしさ」は、厳密に1867（慶応3）年の大政奉

還以前の歴史的根拠を必要としているものではないことも特徴である。すなわち学術的な「江戸時代以来」と、町の特徴とが必ずしも一致していないが、そうであるがゆえに町の中全体が「小江戸」という魅力や特徴で統一され、価値を見出しやすくなっていることも、看過できない事実であろう。そして川越は、江戸時代には川越藩の城下町であったという事実とも相まって、佐原、栃木と比較してより複雑な様相をみせる。次節より川越における小江戸の構成要素を一つずつ解きほぐしてみたい。

(2) 城下町川越の空間構造

江戸時代における川越城と城下町の配置（図6）を模式的に表すと、まず城郭を台地の北東端に構え、南西側の低湿地を堀として有効に活用し、城郭の北側と南側に続く区画に武家屋敷を配

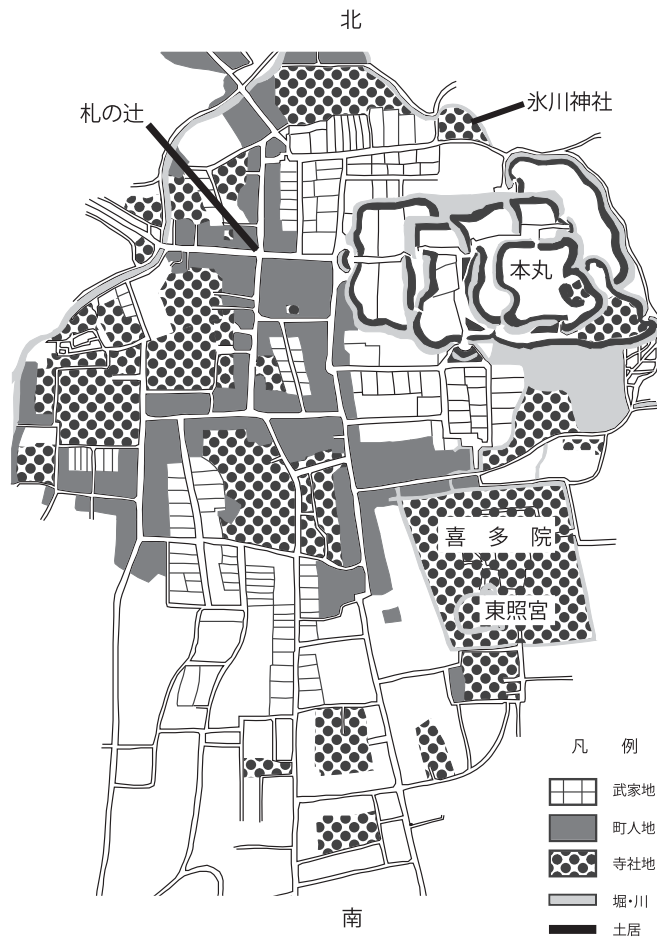


図6 川越城下町における城郭と町割り — 1818（文政元）年以前 —
 （川越市立中央図書館蔵「川越御城下絵図」より作成）

していることがわかる。一方、城下町は城郭と武家屋敷と同じく台地上の西側一帯に町立てされている。そして城の西大手門から西進した道が城下町を南北に走る目抜き通りと交差する地点が高札場のあった「札の辻」で、町人の経済活動の中心地であった。

つぎに主要な寺社に注目すると、城郭の北方に川越氷川神社があり、南方には喜多院と仙波東照宮が存在する。川越氷川神社は城下町の総鎮守であり、この例大祭における付祭りが今日の川越祭りである。喜多院は徳川家康の関東進出に前後して天海僧正が入った無量寿院北院を再興の後に開山され⁽³⁷⁾、1612（慶長17）年に無量寿院を喜多院と改める。この天海が喜多院にいたことが縁で、1638（寛永15）年川越城下に大火が発生した際には、その復興時に將軍徳川家光より江戸城内本丸御殿の一部移築を許された由緒にもつながっていく⁽³⁸⁾。このことは、江戸との地域間関係を含むため、詳しく後述したい。

このように、川越城とその城下町の空間構造を端的に示すならば、谷地に挟まれた南北に細長い台地上のうち、東側に城郭と武家屋敷が、西側に町人地が区画されていた。そして町の北端に鎮守である川越氷川神社、南端に川越藩と將軍家とのつながりを示す喜多院・東照宮が立地していた。ところで、川越の経済的発展の基礎となる舟運の拠点、すなわち河岸は、この範囲外である農村集落一帯に存在していた。城、城下町、川越氷川神社、喜多院と東照宮が互いに面的に接していた一方で、河岸のみが本来の川越から離れ外港として単独で存在していることが、江戸時代以来の川越の空間構造であった。

(3) 江戸時代に由来する川越の構成要素と「小江戸」

1) 川越城とその遺構

広大な面積を有した川越城の縄張りのうち、建築物として現存する数少ない遺構が、本丸御殿⁽³⁹⁾である。藩の格式を十分に示す堂々たる唐破風屋根の玄関を見ると、ここが川越藩17万石⁽⁴⁰⁾の中核にあったことが如実に伝わってくる。また、観光客が札ノ辻交差点から川越市立博物館や本丸御殿方面へと東進してきた場合、進行方向の右側に一部復元された中ノ門堀跡を見ることができ、それまでほぼ平坦な台地上を歩いてきた中で突然現れる、起伏の大きな堀と土塁の存在に驚かされるであろう。しかしながら、この他に城址の遺構を見つけようとするならば、一般的に城跡を想起させる石垣、堀、櫓などの遺構が明確に残る部分はほとんどない。川越城は台地と低地の高低差を巧みに利用し、直線と曲線で構成された堀を幾重にも配することで、本丸、二の丸、三の丸や曲輪等を構成していたことも特徴であるが、それらの景観を偲ぼうとするならば、原地形の理解や地図の読図、景観復元に慣れた者以外には、困難を伴うものとなるであろう。その一例として、御殿の南方に現在も大きな盛り土の基礎部分が残る富士見櫓跡がある（図7）。これは南から城に入る場合の正門となる南大手門とそれに続く田郭門の東側に存在し、かつては

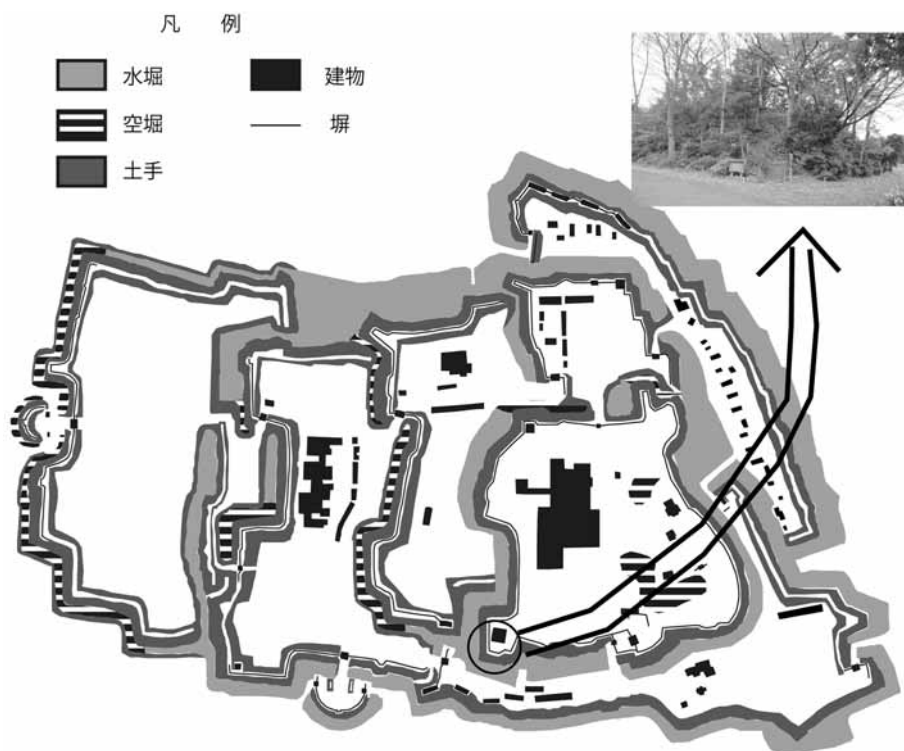


図7 川越城の縄張りと富士見櫓の位置および現況

(下図として川越市立中央図書館蔵「川越城跡現況図」を使用。写真は2016年12月、山下琢巳撮影)

それらと内堀で隔たれた本丸の南西端に突き出た極めて重要な櫓であったと考えられる⁽⁴¹⁾。しかし現在では周辺より比高の高い土台に祠が立ち、案内の看板がある程度で往時を偲ぶものはほとんどない。また、内堀や南大手門へと続いた堀も埋め立てられており、緑地と駐車場になっているためかろうじて堀であったことがわかる程度である。また、筆者らは2016（平成28）年3、5、6月の好天の休日に現地を複数回訪問しているが、「一番街商店街」の一角が観光客で大賑わいの中、この櫓跡に足を運ぶ観光客はほぼ皆無であった。

一方、城郭の南側に続くかつての武家屋敷の一角も、現存する家屋は旧永島家住宅の1軒のみである⁽⁴²⁾。しかも都市空間の住宅地内に存在するため、一見しただけではそれが武家屋敷であると判別できないほどである。このように、川越城に限定して「小江戸」のイメージを求めるならば、建築物が残存している本丸御殿のみが江戸の生き証人として機能していることが知られよう。ただし、近年は街歩き、山歩きのジャンルの一つとして「城跡歩き」も注目を集めている⁽⁴³⁾。この中では天守閣や櫓、堀や石垣、土塁といった主要な遺構にとどまらず、城の縄張りや高低差、あるいは築城者の意図にまで思いをはせるなど、街歩きの範疇を超えた活動も一部では行われている⁽⁴⁴⁾。それゆえ、今後趣味としてのさらなる成熟により、川越城そのものの城郭遺構が、「見

た目にはほとんど残っていない」からこそその宝探的な雰囲気を持ちながら展開していく可能性も否定できない。その際には川越という名前の持つブランド力も加味され、明確な旗振り役が現れた場合には、容易にそれらが開花していく可能性もあろう。

2) 宗教施設の意味と江戸

川越にとって重要な寺社は、町の北部に鎮座する川越氷川神社と、城郭、武家屋敷区画の南西側に位置する喜多院・仙波東照宮である。このうち川越氷川神社は、現在では川越最大のイベントである川越祭りを挙行し、町衆が一丸となる原動力として機能しており、参拝客も多い。一方で喜多院と南接する仙波東照宮は、江戸時代以来の建築物を残す古刹として訪問者も多く、また、境内は一部を除き一般開放されているため、市民の身近な散策場所としても親しまれている。この喜多院は、川越藩にとって徳川将軍家や幕府と直接的なつながりを示す重要な寺院であった。その痕跡は、現在も残る江戸城本丸御殿を一部移築した書院や、境内に南接する仙波東照宮本殿の移築とも密接にかかわっている。

川越藩が徳川将軍家と密接にかかわることになった経緯は、家康からの信頼も厚く、以降、秀忠、家光の三代にわたり将軍の顧問役として精神的な支えとなった天海僧正が、家康の関東移封と時を同じくして川越の喜多院（当時は無量寿寺北院）に入ったことが大きい。その頃に川越藩1万石が成立し、三河以来の譜代筆頭である酒井雅楽頭重忠が藩主となった。1617（元和3）年に駿河国久能山から日光へ家康の遺骸を改葬する際には、その行列が4日間川越に留まり、その間喜多院において天海が法要を営んだという。

川越藩と天海本人との関係は明らかではないが、将軍家と近い存在にある特別な一個人と、その人物が再興した寺院が藩内に存在するという事は、川越藩の格を示すうえでも重要な要素となっていたであろう。一方、江戸時代を通じて川越藩主も度々入れ替わるが、老中や将軍側用人といった幕府要職を務める人物が多く入った⁽⁴⁵⁾。このように、川越藩は江戸の北側の守りであるという地理的な重要性を有するがゆえに、その藩主は親藩や譜代が務め、しかも幕府の重職を担う機会が多いという特徴を有した。一方で、川越藩は江戸時代の初期、家康を権威化する中で生まれた精神的象徴として喜多院を位置づけし、江戸城本丸御殿と二の丸東照宮社殿の一部移築という物的根拠をも含みつつ江戸すなわち幕府や将軍家との関係を保ってきたことが特徴であった。そして藩が解体された明治時代以降は、かつての川越藩の格式、名誉や威光を世に知らしめる「舞台装置」として喜多院や東照宮の由緒や伽藍が大切に守られ、実際に今日に至るまで機能していたのである。

3) 町人地と河岸

続いて、城下町の西側を占める町人地について検討してみたい。前述のとおり城の西大手門から西に直進すると札ノ辻に至り、ここから南北の道路軸に沿った町割りが町人地の中心である。ここには藩の御用商人や舟運の発展とともに問屋が多く集積し、そのことが後に蔵造りの商家が増加する要因にもなった。流通拠点として最も重要な地点は河岸であるが、ここではまず川越市街に通じる主要陸路から見ていくこととしよう（図8）。

先述したように、川越市街は台地上に立地しているため、川越に入るには主要道の多くは谷地から坂を登ることとなる。現在においても、東松山・熊谷方面を結ぶ県道12号線や、坂戸・越生方面に通じる県道39号線などがこれに相当する。一方、川越と江戸を陸路で結ぶ通称「川越



図8 川越市街と河岸の位置関係

(5万分の1地形図「川越」1907(明治40)年,「大宮」1906(明治39)年を使用)

街道」は、この39号線を市街から南進した道となる。そして新河岸川に存在した「川越五河岸」にも、この川越街道を進み台地を坂で下り、左折すると到達する。すなわち、舟運であれ陸路であれ、双方ともに江戸方面に出入りするヒト・モノの流れは、河岸と川越街道の合流地点から川越城下までの約2kmの区間が最も激しく、しかも「烏頭坂」と呼ばれる急坂の難所(図9)も伴って独特の雰囲気を持っていたものであったと推察される。その城下町側の玄関口となるのが通町から松江町にかけてであり、これは喜多院の西側に位置する。これら河岸と川越城下とを直接的に結び、ヒト・モノの往来が作り出す賑わいの大きな中心であったはずの松江町以南の川越街道が、現在の川越観光や「江戸的」な存在の集積から外れていることも注目されよう。また、川越・本川越両駅や、喜多院の双方から「一番街商店街」方面を目指して観光客が散策する際には、川越街道ではなく、その西側を南北に通る大正浪漫夢通りを動線としていることも興味深い。

ところで、小江戸と称される関東3都市のうち、佐原と栃木はかつて河岸として機能した水辺の空間と、歴史的景観の残る商業機能が重なって存在しており、そのことが江戸との舟運で栄えた往時の雰囲気の演出にもつながっている⁽⁴⁶⁾。しかし川越においては、江戸とのつながりの発着点となる河岸が商業中心地から大きく離れて存在しており、しかも新河岸川も河川改修⁽⁴⁷⁾により舟運最盛期と比較して景観、流路ともに大きく変化している。河岸も「川越五河岸」という複数箇所が同時に機能するほどの繁栄を誇っていたが、現在ではその分散した機能ゆえに実際に訪れる際のランドマークの作りづらさを内包している。それゆえ、かつての繁栄や江戸との緊密性は、実際の河岸が観光地として機能しているのではなく、言葉とイメージから補完する状況と



図9 現在の烏頭坂

(2016年12月, 山下琢巳撮影)

なっている。

本章ではとくに江戸時代に存在した川越を特徴づける構成要素それぞれに着目し、それが今日の「小江戸」イメージにいかに関結しているかを検討した。現在の川越市街は、①とくに舟運により江戸（東京）との間で形成された地域間関係を知る手がかりとなる景観、②江戸時代のものが今も存在する、歴史性、文化財的価値としての景観や遺構、③として②のうち江戸時代において、当時の川越藩が重要視した将軍家や幕府とのつながりを象徴する「江戸」との関係、というように少なくとも元来、主体の異なる3つの「江戸」的要素が存在し、それらが混在することで出来上がったイメージの上に成り立っていた。

現在川越市街のなかで最も「小江戸」らしい札ノ辻交差点以南より連雀町交差点以北の、「一番街商店街」を中心とした蔵造りの町並み一帯は、これら3つの要素が混ざり合い、しかも一部には川越市街よりも外に分散して存在する個別要素それぞれの歴史的背景を再構成し、1ヵ所に「見立て」た場として機能していることが特徴である。

IV 観光化の進展における新たな観光資源点描

(1) 観光資源化する商店街

1) 蔵造り景観「一番街」の観光資源化

川越の重要な観光資源となっている蔵造りの町並み景観は、前述の通り「価値観」の変化によって観光資源としての価値が見出されたものである。また、学術的観点からも蔵造りの景観である「一番街」に注目しており、歴史地理学会が2度にわたる川越巡検を実施している⁽⁴⁸⁾。

a. 川越城下町における商業地の形成

蔵造り景観「一番街」の基礎は、川越城主松平信綱が1638（寛永15）年の城下で発生し300軒程の家屋を消失した大火の後に行った町割りにまで遡る。この町割りの際に札の辻で直交する南北方向の道路に沿って南北に長い町人地の区域「十カ町四門前」を定めた。すなわちそれは、上五カ町（本町・高沢町・喜多町・南町・江戸町）、下五カ町（多賀町・鍛冶町・志義町・志多町・上松江町）の行政区分を実施し、町人地の西側に位置する養寿院・行伝寺・妙養寺・蓮馨寺の門前を総称したものである⁽⁴⁹⁾。川越城下町では、城の西大手門に繋がる大手筋に向かった方向を縦町、南北方向に直交する街を横町と称し、古くは北側にあった上五カ町が商人町、下五カ町が職人町という性格を持っていたが後に職人は裏店へ移り、下五カ町も商人町の性格を持つようになったことで、札の辻付近が最も殷賑をきわめた商業地の中心となった⁽⁵⁰⁾。このように地形的にも西・北・東を河川に囲まれ、南東から南方向に江戸や所沢へ道が繋がっていた川越城下町は、すでに商業地が南に拡大する条件を有していた。

b. 川越大火と「蔵造り」

川越の市街地は、近世以来しばしば大火に見舞われてきた。特に1893（明治26）年3月に発生した大火は川越全町の4割近くに相当する1,302戸を焼失し、このことを契機として今日目にするのできる蔵造りの町並みが出現した⁽⁵¹⁾。したがって、今日の川越において重要な観光資源であり、また「小江戸」というキャッチフレーズとともに紹介されることが多い一番街の「蔵造りの町並み」は「明治期に創出された景観」であって、江戸時代の景観ではない。この大火以前の川越城下町の町家は、「川越素麺」のなかで元禄年間に商人町が繁昌することを条件に板屋根にしたいと願い出たもののそれがかなわずに草屋根のままであったとの記述があることが指摘されている⁽⁵²⁾。こうした町家建築の中に瓦葺の二階建ての町家が見られるようになったのは文化年間以降のこととされている。現存する蔵造りのうち最も古い町家は1792（寛政4）年建築の旧南町に位置する大沢家住宅である。大沢家住宅が建築された時期は、江戸が1657（明暦3）年の明暦の大火からの復興として蔵造り建築が普及してきた時期と一致することから、江戸での情報に影響を受けて建築したものと推測される。

それでは、これら一部の住宅を除き、江戸時代における川越の景観はいかなるものであったか。大火災の被害に遭遇して史資料が乏しく、まだ十分に解明されているとはいえない。しかし、上述のように大火で焼け残った大沢家が蔵造りであり、そのため周囲の家々が大火後の再建において蔵造りを採用したという経緯からみて、大火で焼失した建物の大半は蔵造りではなかったとみられる。川越市立博物館が収集した古写真のなかに、貴重な「明治10年代」の景観写真がある⁽⁵³⁾。これによれば、現在の「一番街」とその周辺には木造瓦屋根の家屋に交じって石置き板屋根の家屋が存立していたことが判明する。川越における瓦屋根と板屋根の比率までは明確にならないが、江戸時代後期あるいは明治時代初期において、家屋が連檐する「町場」に板屋根が存在したことは他地域の例からみて想定できる。図10は、中山道奈良井宿（現、長野県塩尻市）において確認される石置き板屋根の景観である。奈良井宿をはじめ旧街道の宿場町では家屋が連続密集しており、しばしば板屋根の景観が認められる。このような状況からみて、「小江戸」との愛称で親しまれている川越「蔵造りの町並み」は、江戸時代には図10にみられる石置き板屋根が混在する町並み景観であったことが推察される。

明治26年大火では、大沢家住宅のほかにも旧高沢町の前田家住宅や旧志義町の松本家など、焼失を免れた蔵造り建築がいくつか指摘されており⁽⁵⁴⁾、防火建築としての蔵造りの威力をまざまざと見せつけることとなったであろう。それゆえ、明治26年大火からの復興では、蔵造り建築の防火性が重要視されるとともに、東京における銀座煉瓦街建設の影響により、大火復興の際には本来の蔵に加えて店や居住空間も蔵造りや塗屋造りで建設することが流行した⁽⁵⁵⁾。川越の蔵造り景観の出現はこうした不燃化を意識した都市景観が流行した時期に相当し、明治30年代

には漆喰の塗り壁に瓦屋根といった蔵造りの町家が多数存在していたことが当時の広告からも読み取れる（図 11）。



図 10 中山道奈良井宿における現存する板屋根

(2016年5月, 小口千明撮影)

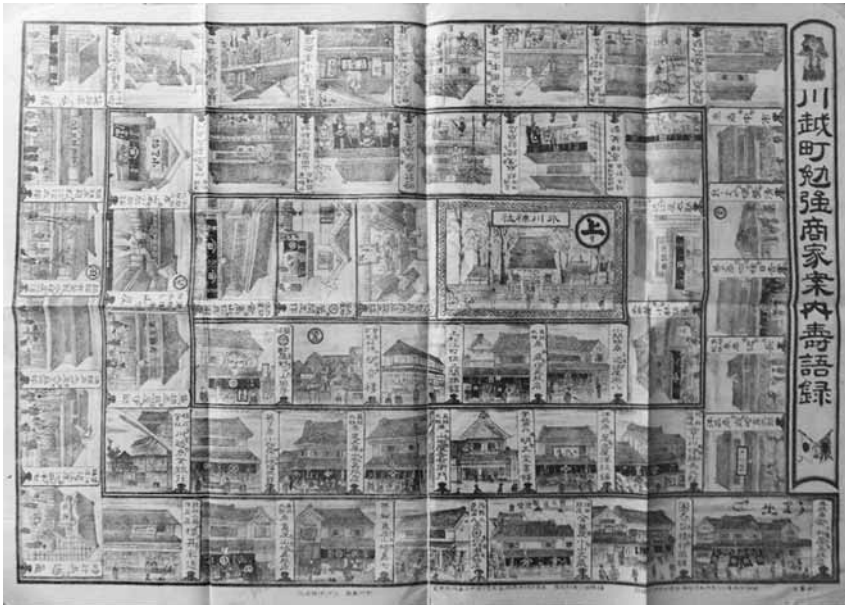


図 11 広告に描かれた明治 30 年代の川越商家

(1901 (明治 34) 年「川越町勉強商家案内寿語録」, 高橋珠州彦所蔵)

c. 商業機能の衰退と景観の再評価

近世城下町の町割りによって誕生し明治期まで繁栄をつづけた「一番街」は、大正期以降衰退の傾向が見られ始める。衰退の要因はいくつか考えられるが、溝尾・菅原⁽⁵⁶⁾によれば、昭和金融恐慌の際に秩父や桐生などの高級品を扱う機業地が機械化で成功したことに対し、低価格商品を扱っていた川越繊維業界は対抗できず店蔵を手放す商人が多かったことが第一に挙げられている。さらに、明治期から昭和期にかけて新たな鉄道駅が市街の南端に設置される一方、後に詳述する「一番街」に近接していた川越久保町駅が廃止されたこと、第2次大戦時の食糧管理法によって一番街にあった穀市が消滅したことなどが衰退の原因として挙げられている。こうした問屋機能を有していた「一番街」に追い打ちをかけたのが、1972（昭和47）年にトラック輸送に対応しうる卸売団地が郊外に建設され、「一番街」付近のほとんどの問屋が移転したことであった⁽⁵⁷⁾。

川越の蔵造り景観を再評価しようとする動きが見られるようになったのもこうした「一番街」の衰退が顕著になった時期であった。溝尾・菅原は「一番街」を中心とした町並み保存を、1970年代に始まる「調査・研究期」、1980年代から1998年までの「街並み整備事業実施期」に分けている。前者は、1970年に全国で実施された文化庁の民家緊急調査により、建築史研究者からの町並み保存に向けた提言に端を発する。その後、文化庁の補助事業として「伝統的建造物群保存対策調査」が実施され、川越市文化財保護協会編の報告書⁽⁵⁸⁾が作成された。こうした「調査・研究期」は、現在の蔵造り資料館となっている旧煙草問屋「万文」（図12）の川越市による買い



図12 川越蔵造り資料館となった旧煙草問屋「万文」

(2017年1月, 田嶋豊穂撮影)

取りなど一定の成果はあったものの、市民と行政の足並みがそろわず、1975（昭和50）年に改正された文化財保護法による重要伝統的建造物群保存地区制度の適用にまでは至らなかった⁽⁵⁹⁾。こうした町並み保存の低迷期に画期となったのが、「一番街」の南に隣接する仲町の敷地に高層マンション建設計画が持ち上がったことである。景観破壊を危惧した住民らのマンション建設反対運動が、川越の蔵造りの町並みを再評価する議論へと発展し、1983年には民間団体「川越蔵の会」が発足、行政への提言などを住民主体で行う体制がとられるようになった。行政側も商店街振興や都市整備関係の補助金を用いて各種事業への取り組みが可能となり、官民一体となった町並み保存活動が面的に展開されるようになった。こうした一連の活動は、一番街の商店主らで結成した「町並み委員会」によって1988（昭和63）年に『川越一番街 町づくり規範』（以下、『規範』）が承認・発効されたことで一定の成果を得ることになる。『規範』は地域全体の整備に関する事項はもちろん、建築物を改装・改築する際の指針として、窓の形状や壁の色、材質、間取り、看板など67の細項目について指定している。このように本格的に蔵造り景観を官民一体となって保存しようとする段階に至り、1998（平成10）年に「重要伝統的建造物群保存地区」指定を受けることになるが、川越では最初に蔵造り建築の価値が評価されてから約30年という時間を要した。こうした町並み保存活動が行われる中、1970年代には埼玉県が指定する「ふるさと歩道」の1コースとして観光案内図付きで紹介されたほか、1979（昭和54）年開局のテレビ埼玉の放送では川越紹介コーナーを設け、川越市が積極的に菓子屋横丁や「一番街」の景観などの情報発信に努めたことが観光化促進の足掛かりとなった⁽⁶⁰⁾。川越市内でも時間をかけて官民一体の町づくり活動へと発展した「一番街」のこうした経緯は、それに隣接する旧銀座通り商店街などの他の町づくり活動にも影響を与えている。そして「一番街」の景観は、観光地の視点のみならず、日本各地で見られる中心市街地活性化や町並み保存活動の参考、視察対象として、また地理学的な地域調査の観点からも欠くことのできない重要な調査対象として存在している。

2) 大正浪漫夢通りの観光資源化

大正浪漫夢通りは蔵造りの町並みで観光客をひきつける「一番街」の南に隣接し、今日では「大正イメージ」の商店街として注目を集めている。この通りは、「一番街」の通りが仲町交差点で行き止まりであった時代に、かぎ型に東から南へ折れて「西町通り」へ、さらに所沢方面へとつながる、川越城下の主要な南北軸の一つであった。現在の「大正イメージ」の商店街となる以前は銀座通り商店街と称しており、日本各地にみられる「銀座」を冠した商店街と同様、東京の銀座の賑わいにあやかる「見立て」商店街の一つであった。また、アーケードで道路を覆い、雨天でも傘を差さずに歩ける川越唯一の商店街でもあった。しかし、1933（昭和8）年に仲町交差点から蓮馨寺の境内を貫通し本川越駅前に通じる南北の主要道路が開通し、新たに中央通り商店

街ができたことや、丸広百貨店の移転、「一番街」の中心性の衰退といった影響を受け、銀座通り商店街も衰退化の一途をたどっていた⁽⁶¹⁾。

銀座通りの商店街の町づくり活動が本格化したのは1990年代からで、隣接する「一番街」の先行事例があったため、住民の合意形成に時間はかからなかったという⁽⁶²⁾。また、明治期建築の蔵造り建築が軒を連ねる「一番街」と本川越駅周辺に昭和期に形成された新興の新富町通商店街の間に位置することや、蔵造り建築の他、洋風建築や「看板建築」の町屋など多様な大正期建築が建ち並ぶ商店街であったことから、「大正浪漫」というコンセプトが住民や行政にも受け入れやすく、町並み整備に要する時間も短縮された⁽⁶³⁾。こうして「大正イメージ」の商店街へと変貌したのは、商店街を覆っていたアーケードを撤去し、石畳の商店街へと改修が行われた1995（平成7）年である。この年に名称も大正浪漫夢通りへと改称し、1999（平成9）年に川越商工会議所が中心市街地活性化法の事業主体としてTMO⁽⁶⁴⁾の認定を受けると、「大正イメージ」の街路灯設置や電線地中化などのモール化事業が進んだ。これにより川越の中心市街地では、観光客が利用する主要な駅から北に向かって、昭和～大正～明治に形成された商店街がそれぞれに個性を強調しながら続くことで、新たな観光資源となっている。

(2) 旧川越織物市場と旧栄養食配給所

川越の経済活動を示す重要な遺構が、川越市松江町にある旧川越織物市場である（図13）。江戸時代の川越は城下町として政治・行政都市であったが、新河岸舟運の存在により、米穀をはじめとする物資が集散する経済都市でもあった。江戸時代から明治時代へ移行し武士による支配が終焉を迎えると川越城は政治的核心としての機能を失い、政治・行政都市としての川越の性格は大きく変化した。当時、日本各地の城下町のなかで明治新行政による府庁・県庁が置かれた諸都市は、例えば仙台や広島など、おおむねその後も成長していく。ところが、川越は埼玉県最大の都市であったにもかかわらず埼玉県庁が置かれなかったために、川越の政治・行政機能は低下した。この時期に川越は致命的な衰退を回避し、経済的中心としての機能を維持することができたといえるが、その背景には川越とその周辺地域における綿織物業の隆盛があった。ただし、明治に入って以後の松方デフレ期などその道は平坦ではなかったが、城下町として政治・行政機能が注目されがちな川越の歴史において、経済史という側面からその発展や苦境打開の足跡をたどることは重要な意義がある。

幕末・明治期を中心とした川越における木綿商いと川越織物市場に関しては、田村 均監修・川越織物市場の会編集による研究成果がある⁽⁶⁵⁾。田村ほかによれば、江戸時代後期の川越は「川越唐棧」や「川越結城」とよばれる縞木綿の集散地で、「川越唐棧」の意匠は青梅（現、東京都青梅市）で産出される青梅縞などとならび江戸で人気を博したという。「川越唐棧」は、幕末



図13 保存され交流事業に活用される旧川越織物市場
 学術団体（歴史地理学会）による見学希望に川越市都市景観課が対応されている場面。
 （2016年6月，小口千明撮影）

維新期になると機械紡績による細手木綿に化学染色を施した「二タ子縞」へと発展する。しかし、明治中期の不況のなかで、所沢で織物同業組合が発足するなど入間郡内の生産・流通構造が変化し、木綿取引における川越の地位は低下した。そのような状況下での挽回策として川越では1900（明治33）年に商業会議所（商工会議所の前身）が設立され、同会議所が推進して1910（明治43）年に川越織物市場を開設した。川越織物市場は六斉市と同様1か月に6回、「5」と「10」がつく日に開催された。開設当初は活況を呈した川越織物市場であるが、東京の百貨店による川越の買継商からの直接仕入れなど次第に織物市場を通さない取り引きが増加し、川越織物市場は1917（大正6）年頃に閉鎖された。

旧川越織物市場の建物は、以後、建物に少し手を加えて長期にわたり住居として利用された。その後建物の老朽化が進み、2001（平成13）年に建物を取り壊してマンションへの改築計画が発表された。折りしも1999（平成11）年に「一番街」が重要伝統的建造物群保存地区として選定された直後であり、景観保全に対する住民意識が高まりをみせていた時期であった。マンションの建設計画を機に住民による旧川越織物市場保存の動きが始まり、次第に住民運動として盛り上がりを見せた。現在では住民が主体となり、川越市の支援を得ながら、建物の保存にとどまら

ず、旧川越織物市場という空間を利用した各種ワークショップの開催など住民や各種機関との交流活動が行われている。「観光資源」としての活用を含め、川越の歴史を物語る景観として注目に値する施設といえる⁽⁶⁶⁾。

旧川越織物市場に隣接して、同じく川越市松江町に旧栄養食配給所の建物がある(図14)。この「栄養食配給所」も学術的価値が高い施設といえる。旧栄養食配給所は旧川越織物市場と同一敷地内にあるが、設立の経緯はまったく別個のものである。川越市都市景観課の情報⁽⁶⁷⁾にもとづけば、川越市において栄養食配給所の修復調査が行われており、1934(昭和9)年、1937(昭和12)年頃、1943(昭和18)年などの活動状況が一部判明するとのことである。

栄養食配給所は国立栄養研究所の方針にもとづき、主として工場労働者の栄養水準向上のために設置された協同組合方式の食事配給施設で、1934年に日本初の「栄養食配給所」が埼玉県川口市に設置されている⁽⁶⁸⁾。当時の川口は、中小の鋳物工場が多数立地する工業都市である。ほぼ同年に栄養食配給所が川越に設置されたことは、川越が工業都市としての側面をもち、工場労働者に対し川口と同様の必要性があったことを示すものである。川口を例に献立内容をみると、蛋白質、脂肪、ビタミン、無機質など栄養バランスが考慮された食事が1日3食配給されており、



図14 原形に近いかたちで残る旧川越栄養食配給所
川越市都市景観課の許可を得て入場および撮影。

(2016年6月, 小口千明撮影)

住民の健康増進に寄与したものと推察される。現代では「食」による地域活性化が図られる例が各地に存在し、当該地域における「伝統食材」や「伝統料理」の掘り起こしが行われているが、川口において配給された栄養食の実例として「衛生煮」⁽⁶⁹⁾ などという耳慣れない献立がある。この「衛生煮」をはじめ栄養食配給所における献立は、近年「町おこし」と称して「創作」される俄かづくりの郷土料理とは異なる。栄養食配給所の献立は地域で実践されたものであり、今後、川越の献立事例などをさらに精査すれば、復活させるに価する実在の「地域メニュー」を発見できる可能性がある。

(3) 旧川越電気鉄道「川越久保町駅」跡

川越電気鉄道は、1904（明治37）年に100kW出力の発電機2基を備えた出力260kWの川越火力発電所を川越町堅久保に建設し最初の事業を開始した。川越電気鉄道は、この発電所から川越町内431戸に向けて直流200ボルトの電力供給を開始した埼玉県下初の電気事業者でもある。この発電所は常磐炭田から供給される石炭を燃料としていた。鉄道の営業は1906（明治39）年4月16日に川越久保町・大宮間で路面電車による運行を開始したのが最初である。その後鉄道事業は、1922（大正11）年6月に武蔵野鉄道に譲渡され、同社の改称に伴って西武鉄道大宮線となった。

西武鉄道大宮線の事業は、1940（昭和15）年に両駅間を29分で結ぶ国鉄川越線が開通したことで状況が激変し、乗客減少のため翌年に鉄道事業を廃止し同線は廃線となった。鉄道事業の廃止後、送電事業は東京電力に引き継がれ、もとの鉄道路線に沿ってバスの運行が行われるようになった。このバス路線は西武バスによって本川越駅・大宮駅西口間で運行されてきたが、2016（平成28）年現在、市界を流れる荒川の西側に位置する住宅団地「川越グリーンパーク」までの運行となっている。

現在では廃線から80年近く経過しているため、線路の痕跡はほとんど残されていない。痕跡が確認できる場所は、わずかにJR川越線指扇駅付近で国鉄川越線と交差していた個所が県道のガードとして残っている程度である。しかし旧川越久保町駅周辺では、一部区間が専用軌道であったことからその痕跡が残されており（図15）、旧川越久保町駅構内で大きくループを描いていた線路跡が確認できる。大宮駅方向から旧川越久保町駅に入線した電車は、このループ線を使って方向転換し折り返し運転を行っていた（図16）。このループによる折り返し運転は、運転士は運転台を移動することなく反対方向に出発でき、運行上重要な役割を果たしていた⁽⁷⁰⁾。旧川越久保町駅の駅舎は1960年代後半まで荒廃したまま残存していたが現在は失われ、同じ場所に東京電力川越支店の建物が建設されている。また、貨物用のホームと車庫のあった場所は、川越市中央公民館や公園として利用されている。これらの敷地では、道路と駐車場との境界が線路跡を利

用した曲線を描いているなど、現在でも鉄道事業が行われていた時代の痕跡を見ることができる。



図 15 県道から川越久保町方面に分岐する専用軌道の跡

(2016年11月, 古川 克撮影)



図 16 旧川越久保町駅構内の線路配線図

(2016年12月, 古川 克撮影)

V おわりに

川越は近年都心からの日帰り観光地として定着した感があり、休日を中心に非常に多くの観光客が訪れている。しかしながら「小江戸川越」の文言と蔵造りの町並みの映像・画像が様々な媒体で紹介されるため、学術的な観点に注意が払われることがほとんどなく、「小江戸」の構成要素も顧みられることは少ない。本報告は、近世における川越城下町の町割に端を発する中心市街地の成り立ちを踏まえううえで、「観光」の観点から歴史地理学的に近現代川越の変容を把握し、観光地としての特質を検討することで、巡検等の実地見学を行う上での着眼点を示すことを目的とした。

川越市街には江戸との結びつきを現代に伝える施設や痕跡が多数残されている。川越城富士見櫓などの史跡、氷川神社や喜多院をはじめとする寺社建築、鍵型に屈曲した主要街道などである。「小江戸川越」として一般にも知れ渡る川越であるが、これら江戸や江戸時代とのつながりを示す場所を訪れる観光客は、「一番街」や菓子屋横丁などに比較して少ない。一方で「見立て」としての「小江戸川越」イメージを構成する要素は多岐にわたり、明治期以降も産業や都市構造の中に受け継がれた。それらは例えば、蔵造りの町並みの場合、度々の大火に見舞われた川越の人々が、同様に江戸時代から明治期にかけて大火の度に復興した江戸・東京の防火建築に倣ったものであり、菓子屋横丁が活況を呈したのも関東大震災で打撃を受けた東京の製菓業界に代替する役割を担ったためであった。また、旧織物市場や併設された栄養食配給所の建物群、旧川越久保町駅跡のラケットループの痕跡など解体や消滅の危機を乗り越え現存しているものもある。これらも生産地と一大消費地である東京を結び付け、それらを支える役割を果たしてきたものである。一方、中心商業地の南端に鉄道駅が設置され、徐々に中心市街地が南北軸の南へと拡大したという川越市街そのものの特徴も、東京と川越を直結させようとする鉄道誘致競争の痕跡として捉えることができよう。このように近現代において近世以来の都市構造を受け継ぎ発展してきた川越は、随所に東京との関係を見出すことができる。本報告では、それらのすべてに対して十分な検証が行えたとは言えないが、近現代における価値観の変化による観光スポットの誕生や再認識に至る過程を含め、川越市内の各地ごとに新たな知見を得ることができた。これらを巡検コースの選定と意味づけに利用すると共に、他の小江戸、小京都との比較指標として精度を上げることを今後の課題としたい。

〈付 記〉

本稿を作成するにあたり、川越市都市計画部都市計画課副課長 福釜周二氏、主任 町田順一氏、主任

上村麻梨子氏には旧川越織物市場、旧川越栄養食配給所の見学や資料の閲覧にあたり御高配を賜りました。以上、記して感謝申し上げます。

なお執筆分担は、山下(Ⅲ)、高橋(Ⅱ, IV(1), V)、小口(Ⅰ, IV(2))、古川(IV(3))であり、山下、高橋、田嶋、小口で全体の調整を行った。

《注および文献》

- (1) 三友国五郎「(5) 東上線沿線の都市群 朝霞・川越・東松山」(青野壽郎・尾留川正平編『日本地誌 第6巻 群馬県・埼玉県』二宮書店, 1963), 370-373頁。
- (2) 立正大学人文地理研究グループ「蔵づくりのある町 川越」地理 21-3, 1976, 102-109頁。
- (3) a. 川越市総務部市史編纂室『川越市史 第3巻 近世編』川越市, 1983。
b. 川越市総務部市史編纂室『川越市史 第4巻 近代編』川越市, 1978。
c. 川越市総務部市史編纂室『川越市史 第5巻 現代編Ⅱ』川越市, 1981。
- (4) 杉村暢二「川越の市街地形成と商業中心の移動」帝京史学 10, 1995, 113-137頁。
- (5) 溝尾良隆・菅原由美子「川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全」人文地理 52-3, 2000, 84-99頁。
- (6) 溝尾良隆「川越市における地域ブランドとしてのサツマイモのイメージ形成」立教大学観光学部紀要 4, 2002, 57-67頁。
- (7) 寺阪昭信・内藤ふみ「江戸のなごりを再生する 川越市」(寺阪昭信・平岡昭利・元木靖編『関東Ⅱ 地図で読む百年 埼玉・茨城・栃木・群馬』古今書院, 2003), 19-24頁。
- (8) 犬井 正「城下町川越の活性化」(菅野峰明・佐野 充・谷内 達編『日本の地誌5 首都圏Ⅰ』朝倉書店, 2009), 452-455頁。
- (9) 永野征男『都市地理学研究ノート』富山房インターナショナル, 2009, 45-58頁。
- (10) 松崎憲三『『小京都と小江戸』論に向けて』(松崎憲三編『小京都と小江戸 ―「うつし」文化の研究―』岩田書院, 2010), 7-30頁。
- (11) 服部銈二郎『都市の表情 ―らしさの表現像―』古今書院, 1984。
- (12) 荒山正彦「文化のオーセンティシティと国立公園の成立 ―観光現象を対象とした人文地理学研究の課題―」地理学評論 68 A-12, 1995, 792-810頁。
- (13) 福田珠己「赤瓦は何を語るか ―沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動―」地理学評論 69 A-9, 1996, 727-743頁。
- (14) 島津 弘「2.1 都市の地形と自然環境を捉える視点とは何か ―東京近郊の段丘城下町, 川越―」(伊藤徹哉・鈴木重雄・立正大学地理学教室編『地理を学ぼう 地理エクスカージョン』朝倉書店, 2015), 17-22頁。
- (15) 鉄道省『日本案内記 関東編』博文館, 1930, 293-295頁。
- (16) 国宝保存法による。同法は1950年に廃止され、以後は文化財保護法がこれに代わる。
- (17) 榊原喜久治編『日本観光大鑑』日本観光新聞社, 1958, 関東地方 36頁。
- (18) 長谷川小太郎『旅程と費用』日本交通公社, 1966(改訂第22版, 初版は1919), 312頁。
- (19) 「一番街」の蔵造り景観についてはIVで詳述する。
- (20) 益井茂夫「公文書からみた「川越鉄道」」多摩のあゆみ 73, 1993, 31-76頁。
- (21) 益井茂夫「公文書からみた「川越電気鉄道」」多摩のあゆみ 73, 1993, 15-30頁。
- (22) 川越電気鉄道の川越側の始発駅となった旧川越久保町駅の痕跡についてはIVで詳述する。
- (23) 斎藤貞夫「鉄道開通と新河岸川舟運の衰退」多摩の歩み 73, 1993, 82-89頁。
- (24) 現在の東武東上線川越市・霞ヶ関間で、入間川鉄橋の右岸堤防付近にあった駅。

- (25) 2016(平成28)年に本川越駅に西口が開設された。このことは、東武川越市駅への乗り換えに要する時間を大幅に短縮するものとして期待される一方、商業地に与える影響は今後検討する必要がある。
- (26) 川越市役所市史編纂室『川越市史資料第六集 明治から大正へ 聞き書き I』川越市役所, 1980, 86頁。
- (27) 前掲(26) 87-88頁。
- (28) 菓子屋横丁の西方で、新河岸川の左岸に位置する。
- (29) 柳井潔「川越に咲いた大輪のひまわり 丸広百貨店」(柳井潔編『川越懐古(川越文化ものがたり) 第二巻』川越文化会, 1999), 81-104頁所収。
- (30) a. 埼玉県産業労働部『県内主要商店街通行量調査』埼玉県産業労働部商業支援課, 2010, 125頁。
b. 埼玉県産業労働部『平成23年度商店街経営実態調査 埼玉の商店街』埼玉県産業労働部商業・サービス産業支援課, 2012, 288頁。
- (31) 前掲(29)101頁。
- (32) 記念誌編集委員会編『株式会社丸広百貨店創立50周年記念誌』丸広百貨店, 1999, 159-212頁。
- (33) 特定非営利活動法人川越蔵の会『酒蔵跡地の有効活用方策検討支援業務 全国都市再生モデル調査 既存ストックを活用したまちづくり賑わい方策検討調査』川越蔵の会, 2004, 3頁。
- (34) 前掲(10)。
- (35) ニシン漁の盛況と北前船による海産物の取引を指す言葉で、江差町公式ホームページのうち、観光情報・江差の文化と歴史紹介ページにも使用されている。
<http://www.hokkaido-esashi.jp/modules/sightseeing/content/0055.html> (閲覧日2017年1月12日)
- (36) 前掲(10) 257-264頁には2009(平成17)年7月末現在における全国「小京都」「小江戸」一覧が掲載されている。
- (37) 埼玉県編集・発行『新編埼玉県史通史編3近世1』1988, 728-732頁によると、戦国時代より川越の無量寿院中院が関東天台宗の本寺であり、再興の過程で北院(喜多院)にその本拠が移った。なお、天海の喜多院入寺の年次は明確ではなく、県史では1612(慶長17)年以前としている。
- (38) 前掲(37) 275-276頁によると、大火により東照宮、喜多院も被災し、天海が家光に懇願して江戸城紅葉山に存在した別殿の一部移築を許された。このとき荒川を利用して江戸から資材を運送したことが、後の新河岸川舟運の開始につながる。
- (39) 現存する本丸御殿は1848(嘉永元)年再建したが、維新後の廃城令により1887(明治20)年頃までに玄関と一部を残すのみとなった。
- (40) 1841(天保12)年、藩主松平齊典の時代に2万石の加増を受け、最大の17万石となった。
- (41) 富士見櫓は、江戸時代を通じて複数回改築・改修されているが、最後の改築状況として、「前橋藩松平家記録」, 安政2年10月2日条, 前橋市立図書館蔵, と多加谷敏則氏蔵・前橋市立図書館寄託「前橋城御門再築設計図」, から安政の大地震で破損した櫓の修復に関する顛末と図面が判明する。
- (42) 文化年間(1804-1818)頃には屋敷が存在しており、300石程度の中級武士や御典医が居住したことが判明している。
- (43) 例えばNHK, Eテレ「趣味どきっ!」2016年2-3月の火曜日は「お城へ行こう! ~名将の素顔をお城が“語る”~」が放映され、番組では11の城跡が取り上げられた。
- (44) 例えば「TEAMナワバリング」の活動では、城跡の現地訪問やグッズの製作販売を手掛けている。活動の詳細は <https://www.facebook.com/teamnawabaring/> (閲覧日2017年1月12日)
- (45) 前掲(37) 266-303頁, および埼玉県編集・発行『新編埼玉県史通史編4近世2』1989, 254-278頁によると、川越藩主在任中もしくはその後に幕府老中に任ぜられたのは酒井忠利・忠勝, 堀田正盛, 松平信綱, 柳沢吉保, 秋元涼朝, 松平康英の7名である。

- (46) a. 牧野眞一「小江戸としての栃木 ― 舟運の歴史と山車祭りから ―」前掲(10), 169-198 頁。b. 金野啓史「佐原のまちづくりと「小江戸」「江戸まさり」」, 前掲(10) 227-255 頁。
- (47) 川越市総務部市史編纂室編『川越市史第4巻近代編』川越市, 1978, 316 頁によると, 1918 (大正7) 年に埼玉県が荒川下流の河川改修工事を開始し, 1920 (大正9) 年新河岸川に着手, 1928 (昭和3) 年には川越から荒川合流点までの全区間に及んだ。
- (48) 井上政一「第139回例会『川越巡検』巡検記」歴史地理学 143, 1988, 55-56 頁。伊藤大生「第59回歴史地理学会大会巡検報告」歴史地理学 58-4, 2016, 50-52 頁。
- (49) 川越市教育委員会編『蔵造りの町並み ― 川越市伝統的建造物群に関する調査報告書』川越市文化財保護協会, 1976, 6 頁。
- (50) 前掲(4) 117 頁。
- (51) 前掲(5) 87 頁。
- (52) 前掲(49) 8 頁。
- (53) 川越市立博物館編・発行『第2回企画展 写真展 ― 明治・大正・昭和の川越 ―』, 1990, 10 頁。
- (54) 前掲(49) 8 頁。
- (55) 佐藤滋『城下町の近代都市づくり』鹿島出版会, 1995, 167 頁。
- (56) 前掲(5) 87 頁。
- (57) 前掲(5) 88 頁。
- (58) 前掲(49)。
- (59) 前掲(5) 89 頁。
- (60) 前掲(5) 91 頁。
- (61) 勝又晃衣・曾根陽子・勝又英明「連鎖的まちづくりによる中心市街地の再生に関する研究 ― 川越大正浪漫夢通りを対象として ―」日本建築学会技術報告集, 第12号, 174 頁。
- (62) 前掲(61) 175 頁。
- (63) 前掲(61) 175 頁。
- (64) 「Town Management Organization」の略称であり, 中心市街地活性化法に基づく事業を推進する主体として市町村が認定する。TMO が作成した中心市街地活性化の構想が中心市街地活性化法に基づき確実に実施されると認められた場合, その事業は経済産業大臣から認定を受ける。
- (65) 田村 均監修・川越織物市場の会編『川越 商都の木綿遺産 ― 川越唐棧 織物市場 染織学校 ―』さきたま出版会, 2012。
- (66) 平成27年度より川越市の旧川越織物市場保存整備事業が進行中である。
- (67) 川越市都市景観課の資料による。
- (68) 「日本の食生活全集 埼玉」編集委員会編『日本の食生活全集 11 聞き書 埼玉の食事』農山漁村文化協会, 1992, 303-314 頁。
- (69) 前掲(68) 312 頁。
- (70) 現在, 埼玉新都市交通大宮駅で同じ構造が見られる。また, この方式はラケットループとよばれ, ヨーロッパの路面電車では一般的に用いられる構造である。